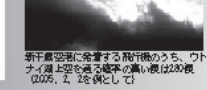
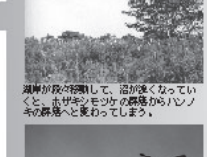
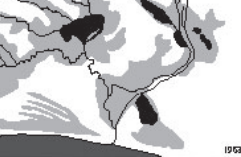


ウトナイ湖
道央一番南に勇払原野があり、その中央部に面積230ha、水深0.5mの海跡湖のウトナイ湖がある。

かつて勇払原野は、釧路湿原に匹敵する広大な湿原地帯だった。人はこれを「不毛の大地」と呼び厄介者扱いしてきた。開拓の狼が原野に入り、厳しい環境での農地造成、そして苫小牧東部大規模工業開発の舞台となり湿原を乾いていった。こうして開発が進む中、美々川とウトナイ湖は、かつての勇払原野の面影を残す、唯一の場所となってしまったのである。

「小さな川の流れる集まる場所」が「ウトナイ」の語源の通り、ウトナイ湖には美々川などが清流を注ぎ、周辺には湿原と原野が広がる豊かな自然を形成し、水鳥たちの聖域となり、湿原を住処とする動植物の宝庫となっている。

春3月には数万羽のガン、カモ、ハクチョウの仲間が渡りの中継地としてウトナイ湖を利用する。1981年5月に、日本野鳥の会は自然保護とその普及・啓蒙を目的として、ウトナイ湖周辺の510haを日本で初めての野鳥の聖域「サンクチュアリ」に指定した。また、日本を代表する重要な水鳥の中継地とし、1991年12月12日にラムサール条約（特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約）の登録湿地として、世界で549カ所目、国内で4番目に登録された。



周辺の開発によって縮小していくウトナイ湖



目の前に見えている景色は、どんなにきれいだと思っても、少なからず人間の世界の影響を受けている。元の姿で残っていることなど皆無に等しい。

人間は周辺環境に手を加えなければ生きていけない。見えるものは、変化し後の姿である。

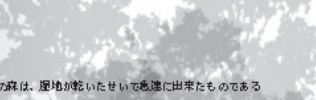
自分たちが何をしているのかを知り、丁寧なバランスをさくらなければならぬ。

候食しすぎではいけない。

現在見えているものは、変化し後の姿であるということを確認しなければならぬ。人間としての距離感が、どんな些細なことでも周りに影響を与えているということを知らなければならない。



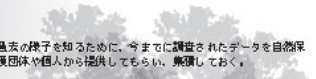
湖に近づいたことによって、建物は段々軽くなっていく。



この森は、原野が乾いたせいで急速に出来たものである



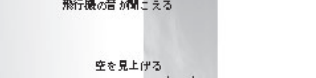
元の原野を踏めるために、湖内きのがらう路はガラスを橋脚に架け渡す



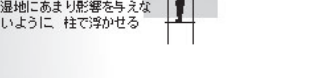
過去の様子を知るために、今までに調査されたデータを自然保護団体や個人から提供してもらい、無償しておく。



どうなってしまうのだろうか
ウトナイ湖について知ろう 原野を見てみよう



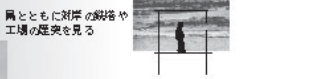
飛行機の音が聞こえる
空を見上げる



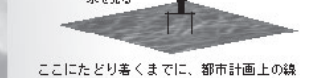
湿地にあまり影響を与えないように、柱で浮かせる



木の足元を見る
原野の地面を見る



鳥とともに対岸の観望や工場の煙突を見る



水を見る

ここにたどり着くまでに、都市計画上の線引きである準工業地域と、保護区の境界を通る。国道から自動車が入っていく、そのアプローチは、人間の世界の中に残された場所だということを感じさせる。

既存の遊歩道が人間が歩ける最小幅、600mmであるため、それをルールのひとつとし、建築を600mmグリッドで計画した。

湖に辿り着くまでに、現在の姿は変化し後の姿である、ということを確認するために、総断ごとに空間を分け、それぞれで見るものが違うようにした。

浮世ノ外ノ道
露地とは、茶室への通路であり、気分を高め心を洗い清めて茶室に臨むための場所である。
ウトナイ湖と対面するまでに、湖のかつての姿を知り、それがどうやって変化したかという過程を学ぶ施設を作る。

苫小牧市と野鳥の会が管理する「ネイチャーセンター」という建物がある。野鳥の会がウトナイ湖サンクチュアリを管理するために常駐させている「レンジャー」が滞在し、訪れた人々が野鳥やウトナイ湖の自然について学ぶ施設である。自分が持った疑問と、築23年になり建て替えが必要な時期であることから、名目上は「ネイチャーセンターの建て替え」にテーマを決定した。